

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2021 朝倉友海



2021/5/21 教養学部前期課程学術フロンティア講義
「30年後の世界へ——学問とその“悪”について」第6講

悪をめぐる三つのパラドクス

総合文化研究科 朝倉友海

いいは悪いで、悪いはいい？

- 「きれいは穢い、穢いはきれい」（『マクベス』）
Fair is foul, and foul is fair.
- 「いいは悪いで、悪いはいい」とも訳される
- 『莊子』 齊物論
 - 「生きることは死にゆくこと、死にゆくことは生きること」
方生方死、方死方生
 - 「善いことによるのは悪いことによること、悪いことによるのは善いことによること」
因是因非、因非因是

道徳的言説について

- パラドクスとは、1) 常識に反する命題、2) 妥当な推論により得られる受け入れがたい結論
- 二元論一般に関わるパラドクスとの関係、未来へ向けていかに「賭ける」かのヒントに
- 「いいは悪いで、悪いはいい」をめぐって
 1. 善は悪であるというパラドクス
 2. 悪は善であるというパラドクス
- 第三のものとして、善と悪の等しさに関するもの

一、「いいは悪い」 = 善は悪である？

- 悪は正義のふりしてやってくる、科学技術の進歩による悪の進化
- 人間愛や同情から人に施すことは「道徳的なこと」ではないというカントの指摘
 - 同情心に富む人の行為が道徳的価値をもつわけではない、むしろ同情心に欠ける人が義務感から行う行為に道徳的価値がある（『道徳形而上学原論』第一章）
- 義務との葛藤から離れている「道徳的狂熱 moral enthusiasm」を批判対象とした（『実践理性批判』）

カントのパラドクス

- 「善および悪の概念は、道徳的法則に先立つのではなく後にあり、道徳的法則によって規定されねばならない」（『実践理性批判』）
- もし善悪が法則に先立っているなら、快・不快の感情によって決定される「趣味的なもの」にすぎない
- 善悪が客観的・法則的なものであるならば、それは**普遍的な原理**により規定されねばならない
- だが道徳法則を実質的・具体的に示すときには結局のところ自愛の原理に帰着する

カントのいわゆる形式主義

- 善悪は法則により規定されるが、その法則を実質的に示すことはできず、つぎの形式をもつものとして示される：
私たちの善悪の判断が法則に基づくもので、その法則が普遍的たることを私たちが**欲し得ること**
- 実際には、一切の権威や利害を超えた理性的命令の声「かくなすべし（定言命法）」に聴き従うということ
→ 儒学と共通の発想が見られる（盡其心者知其性也、知其性則知天矣）
- 自らの理性が課する法則に自ら義務的に従うこと（自律）

「いいは悪い」の進化形：悪に転じる善

- 善が積極的に悪に転じるという弁証法的運動への着目
- 「善は悪である」というパラドクスは「進歩は退化である」というテーゼとして示される

「啓蒙された文明が現実には未開・野蛮へと復帰する」（ホルクハイマーとアドルノによる『啓蒙の弁証法』）

ただし『啓蒙の弁証法』での分析は、啓蒙化されたはずの社会がむしろ低俗で憎悪に基づく言説により動かされていくことの指摘となっている

二、「悪いはいい」 = 悪はむしろ善？

- 善とされるものが悪であることがあるのと同様、悪とされるものが悪でないことがある
- 悪そのもののいくつかの考え方、規範からの逸脱、正当化の不可能性、自律性の喪失
- 「悪」と呼ばれるものに二種類を区別する考え方、もしそれが正しければ「悪(A)は悪(B)ではない」と言えるためパラドクスは解消される
- ニーチェによる「悪」の二つの「起源」の区別

弱者による価値の転倒：復讐的評価様式

- ニーチェは道徳に二種類の起源があることを述べた（「よいとわるい Gut und Schlecht」「善と悪 Gut und Böse」、『道徳の系譜』）
- 「騎士的・貴族的評価様式」では、優れていることが「よい」ことであり、低劣・卑賤・下衆であるのが「わるい」
- 別の評価様式：「強きものは悪い」「惨めなる者のみが善き者である、貧しき者、力なき者、卑しき者のみが善き者である」（同書1-7）
- 「弱いことのみが善きことだ」という逆転の発想としての「復讐的」評価様式 → 「よいは悪い」の別解釈

復讐としての「わるいは善い」

- 騎士的評価様式における「よい」は好敵手への尊敬を伴うもので、自己肯定に基づくもの（能動的）
- 復讐的評価様式は、己を脅かす他者への恐れと憎悪を原理としており、弱者としての自分が「逆に」正しいという価値観の転倒に基づくもの（原理としての反感＝ルサンチマン）
- 「嫉妬を拗らせる」こと——あいつは羨ましく憎らしいから悪だ、私はその逆であるから善なのだ、という考え方は実に人間的な考え方であり、文化に深く根をはっている
- 評価様式そのものの由来を尋ねて考察すべき

三、「いいは悪いで悪いはいい」 = 善悪の等しさ

- 善悪の対立を超えた立場：善と悪は存在の観点からは等しい（存在論的な立場）
- ただし、古来より悪は存在しないとする有力な考え方があった
- 悪は神が創造したのではなく「無」である・「無」へと堕ちていくことである（アウグスティヌスの見解）
- 悪の存在を認めることは難しく、むしろそれと見えな
いところに悪がある

悪において自在であること：天台性悪論

- 悪の存在をめぐる代表的な考え方が東アジア仏教にある
- 「仏」は悪を根絶していない、むしろ悪によく通じるもの
 - 「仏は性悪を断ぜずと雖も、しかも悪に能く達せり、悪に達するを以ての故に悪において自在なり（佛雖不斷性悪而能達於悪、以達悪故於悪自在）」
 - 「仏も亦た性悪を断ぜず、機縁の激する所、慈力の熏ずる所にし、て、阿鼻に入りて一切の悪事に同じて衆生を化す（佛亦不斷性悪機縁所激慈力所熏、入阿鼻同一切悪事化衆生）」（『観音玄義』卷上T34：883a）
- 悪を憎み悪を滅ぼそうとするのではなく、悪を理解し救うものとしての仏

悪の陳腐さと反道徳的シニシズム

- 悪に通じることはずでに悪と同類である？
- 「悪の陳腐さ」：凡庸な人間こそが極め付きの犯罪的な悪をなしうるというパラドクス
 - 陳腐なものこそが極め付きの悪をなしうるとアーレントが述べたとき、ナチス寄りであるとか、大量虐殺を擁護したとして非難され、おそろしいほど人身攻撃を受けた
- 悪はそれと見えないところに存在し得る、だからといって、悪を滅ぼし悪を憎むことはむしろ悪に転じる可能性がある

直観を信じ賭けること

- 思考を停止したところに悪は生い茂ってくる、悪を見つめ腑分けすること、「悪に於いて自在である」こと
- ただし、思考が則る評価様式にもまた精査が必要である（系譜学的思考）
- 結局のところ理性の声を聴くような「直観」によってしか善悪は見分けられないが、直観は時に間違ふ
- 創造性は己の直観を信じた「賭け」によりもたらされる

進歩と後退、繰り返しとしての歴史

- 歴史は繰り返すと言われる、そして文明は進歩しているようでむしろ後退してもいる
- 「あらゆる偉大なる世界史的な出来事や人物は繰り返されるとヘーゲルは述べたが、こう付け加えるのを忘れてしまった、一度目は悲劇として二度目は茶番として、と」（カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』）
- 回避できない性質をもつのが「悲劇」——これは、善悪の判断を超えたところを指している
- 創造性を欠いた繰り返しによる茶番

まとめ

- 善は悪であるというパラドックスは、厳然とした「理性の声」に耳を澄ませることを教える
- 悪は善であるというパラドックスは、評価様式そのものに対する系譜学的な腑分けの必要性を教える
- 善悪の等しさのパラドックスは、悪は異常さではなく凡庸さと結びついていることと、悪を見つめることの必要性を示している
- 未来に向かってどう「賭ける」かのヒントとして